

③ 平田佐矩短歌「木枯」抄（『志のぶ草』私家版、昭和十五年）

わがために言ひ遺すべきことあらじたらちねの母へ行かんと言ひぬ

宿舎なる寺に訪ねてゆきしとき海老などもちて喜ばせたり

行進の列にそひつゝ走りたる未練な兄といつかなり居し
挙手の礼幼きものにたゞ投ぐる軽きほゝ笑み瞳に沁み残る

送るもののことに幼き児の叫ぶ萬歳は遠く海を渡りぬ

物言はず挙手の礼する弟よ船は出てゆく夕靄の中

征ってきます行っておいでと別れしがいまは船さへ見えなくなりぬ

今ははや歡呼の声もしづまりて波の音のみ人はきくなり

われ征かば必ず死なんとひたすらに言ひ重ねしが遂に死にたり

われ征かば必ず死なんとひたすらに佛彫みてありし弟はも

闘はんこゝろ雄々しく酒酌みし青葉のころの山の夜かな

携へて戦さの友と酒酌みしその夜の句など今は形見ぞ

戦のさ中に倒れたゞひとり母を呼びつゝ死にてゆきしか

おさげびのたゞ中にはゝそはの名を呼びにつゝ息絶えにしか

倒れつゝ岩をばつかみ草を噛み戦ひぬきし弟を想ふ

死するとき母を呼びつゝありしならむ黄白城に夜のしらむころ

吹きすさぶ木枯のみが聞えをりて遺骨を抱き家へ帰りぬ

風吹きて沖に白波立つときは戦に死にし弟を憶ふ